

漱石とイブセン

Junko Higasa

夏目漱石が小説『草枕』の中で展開する幅広い知識の中に、ノルウェーの劇作家・詩人であるイブセン(Henrik Johan Ibsen 1828.3.20～1906.5.23)の作品『人形の家』が存在する。イブセンは社会で女性の権利がなかった時代に「女性は社会で男性と同等の扱いを受けるべきだ」と主張して、それを実行させた人物である。しかしその反面、女性に対する否定も行っている。それは矛盾ではなく、女性を「人間」として扱ったからだ。男女同権ならば、権利ばかりでなく義務も男性・女性の区別なく「人間」として一律に判断基準に加えなければならない。漱石にもそういうところがあった。漱石は創作に言及して、家事の合間に小説を書いたジェーン・オースティンを挙げて、女性だから書けないということはないと言っている。これは文筆に限らず何事を成すにおいてもだ。そのため、もし女性が社会で男性と同等の権利を得ようとするならば、それは男性同様の責任を伴うということで、そこには女性に対する容赦はない。つまり女性を認めたこの二人が女性蔑視的に思われた理由は、社会における完璧な男女同権を求めたところにある。実質的には家庭と社会の負担の均衡を欠いてはいるが。

さて、それでは『草枕』に現れたイブセンの考え(漱石の共鳴点)を、原千代海氏訳本を参考に挙げると、まず「道徳の掟には男性と女性、2種類の良心がある」したがってそれを一律「常識の目で判断し、法律の側から判断する」男性側の良心だけで判断することはできない。これが『草枕』が問いかける社会面・藝術面の考慮点である。

次に「(イブセンは)非現実的な女性を恐れない。女性にはどこか真の藝術家と共通のところがあつた。それは実際能力の欠如を補うに足りるものである」「恐れるべきものは物分りの良い老人。つまらぬ仕事に追われている男。目先のことでクヨクヨする男。自分の卑屈な性格に何か役立てばよいと思つている男」これを社会面から見ると、世間は那美さんを「気狂い」扱いするけれど、本当に恐れるべきは戦争で儲けた目先の事に囚われて没落していく男たちである。藝術面から見ると、漱石を批判し流行に迎合して醜さも厭わない作品を書く男たちである。那美さんが「芝居のように画工に見せた一振り」と「戦場に行く久一さんの現実の餞別」として登場する白鞆は、それらの男たちに対する一太刀ではなかつたか。利欲を求めて「人でなし」「文學でなし」になりつつある男たちに、漱石は那美さんを通して社会に「人間の美」、文壇に「藝術の美」の真実を問う。「人情」の麓から登つてきた「半人情」の画工が那美さんの「非人情(藝術)」の真髓に到達したのは、「憐れ」という人間感情美の融合点だつた。

更に漱石は、イブセンが視覚的戯曲『人形の家』で行つた「見振り言語によって無駄な表現の重複を避けた」ことを視覚抜きで『草枕』で試みた。いわば那美さんの身振りを描いた文章によってどれだけ読者に言わんとすることが伝わるか、また演劇を鑑賞するように、那美さんの所作はどれだけ読者に美しい感じを与えることができるかの試みである。彼女の離婚劇に現れるように「家庭における夫の地位も不可侵ではない」時代だからといって、権力を求めて争う「人でなし」の世の中になったら今よりもっと住みにくかろう。だからこそ漱石は、人気を得やすい「道徳の模写」に傾く文学界に、文學の本質である「美しさの表現」の一石を投じたのだらう。(2013.3.16)